

# 短期集中学習によるリスニング能力向上の指導方略について

—シャドウイングとスキーマ理論を中心として—

坂本育生\*

(1999年10月15日 受理)

On the Teaching Strategies for Developing Listening Comprehension

Skills under Intensive Short Courses

—Focusing on Shadowing and Schema Theory—

Ikuo SAKAMOTO

## 緒言

本研究は、昨年発表した、『リスニング能力向上における短期集中学習の効用について』に引き続いて、1999年の夏期集中講義における『実用英語短期講座』での実践的リスニング能力向上のための実践指導例の研究である<sup>1)</sup>。昨年の研究事例においても、217名の学生に対して実施した、1週間あまりの短期集中講座によって、ある程度のリスニング能力向上のデータが得られたのであるが、そのデータ収集のためのリスニングテスト問題は、実用英語検定2級のリスニングテストの過去問題であり、問題数も20問と少なく、客観的で信頼できるデータと成り得るかどうかが、若干の問題も残された。そこで今回の実践指導においては、Proficiency testとしてのリスニング能力測定の信頼性の高い、TOEIC公開テストのリスニングパートの過去問題を使用し、実践指導の事前・事後の被験者のリスニング能力の測定を行なうこととした。また、短期集中講座でのリスニング指導においても、通訳養成の際にしばしば取り入れられる、「シャドウイング」の訓練と、スキーマ理論に基づいて、解答の選択肢から正解を推測してゆく、いわゆる、「トップダウンストラテジー」を中心として、受講生の指導にあたった。その結果、指導以前と以後において、平均点にして、100点満点にして46.6点から54.4点へと、7.8点の伸長が見られ、また標準偏差は、それぞれ9.63と10.25であった。つまり、標準的なテスト作成の目安となる、平均点50点、標準偏差10という、統計学上の目標数値とかなり近い数値を得ることができた。

詳細は後述するが、しばしば内外から指摘されている、日本の大学生の英語能力、特に実用的な聞き取り能力の貧弱さも、短期集中学習によって、その潜在能力を引き出すことが、十分に可能であることが、昨年に引き続き、本年の研究によっても証明されたように思われる。

---

\* 鹿児島大学教育学部英語教育

## (I) 先行研究

坂本 (1998) 及び坂本 (1999) においては、217名の学生に対して実施した、5日間に渡る短期集中講義において、実用英語検定試験2級程度のリスニングテストにおいて、20点満点で、10.80点→15.82という、5点あまりの向上が見られたことを述べた。つまり、約50%の得点から、75%の得点へという飛躍的な伸長を示し、短期指導の結果、約60%と言われる英検合格ラインを突破できたのである。TOEFLテストのデータにおいて、日本人の平均点は、500点に満たず、韓国の510点あまり、中国の560点あまりに遠く及ばないと、しばしば非難される日本人の英語力であるが、きっかけさえあれば、韓国、中国に負けないだけの潜在的な能力を備えている、という実証的な検証ができたように思われた<sup>2)</sup>。リスニング能力向上に関しての、実証的な研究は、これまでも多くの先行研究が見られたが、筆者の勤務する鹿児島大学の学生に対して、そのような具体的な短期集中実践講義を実施したのは、1998年の実例が初めての試みであったので、地方国立大学でのひとつの実践例と成り得たことは、意義深いことであった。

しかしながら、事前・事後のテストは、英語検定2級の過去の同程度の問題とはいえ、別の問題であり、問題数も少なく、データとしての客観性と信頼度において問題が残され、標準偏差や偏差値の数値も測定がなかった。また、英語検定2級合格程度では、将来の伸長の可能性を持った、いわゆる訓練段階にある constituent な人材ではあるが、国際的な舞台上で活躍できる能力を備えているとはとても言えない段階であり、TOEFLテストにおいても、辛うじて有意なスコアとされる400点をわずかの越える程度である<sup>3)</sup>。

また、指導方略も、伝統的なリスニングと音読、コーラス・リーディングであり、目新しい指導法とは言えないものであった。其ゆえ、短期集中学習によるリスニング能力の向上が、ある程度は立証されたが、さらにより科学的で客観的な指導方略とデータが求められるように思われた。そのような状況から、さらに進んだ研究事例として、99年における短期集中学習指導方略の実証研究を行なうこととなった。

## (II) 本研究の目的と方法及び仮説

### (II)-1. 目的と方法

本研究の主な目的は、シャドウイングとスキーマ理論によるトップダウンリスニングストラテジーがどの程度短期集中リスニング能力向上の指導方略と成り得るのか、またTOEICテストによる尺度で、どの程度の伸長が見られるのか、が特に注目された。確かに、リスニング能力の向上のためには、太田 (1994) をはじめとする多くの先行研究で、長時間の訓練が必要であることが示されているが、大学生の潜在能力を、短期間でどの程度引き出せるのかが、特に本研究の重要な研究目的となった。集中講義は、1999年7月10日から17日の7日間（週末を挟んでの正味5日間）にわたり、1日に2コマから4コマ（1コマ90分）の講義、合計15コマを実施した。しかし、最初と最後の時間帯には、受講者のリスニング能力測定のための proficiency test として、45分間の TOEIC リスニング

テストを実施したので、実際の講義は13コマということになる<sup>4)</sup>。

また、1コマ90分の講義時間ではあるが、実際に英語に触れる時間は、正味70分～80分あまりであるので、計15コマの講義中に英語に触れた時間は、最初と最後の合計90分のリスニングテストを含めて、20時間あまりとなる。

受講生は、共通教育受講生の1、2年生、合計75名であり、内訳は、法文学部17名、教育学部12名、理学部3名、医学部13名、歯学部12名、工学部8名、農学部9名、そして水産学部学部2名であった。鹿児島大学の8学部の全てから参加しており、英語を専門とする特殊な学生を対照とした集中講義とはならなかったので、平均的な水準の学生が受講したと思われる。使用テキストとしては、短期集中にふさわしく、また昨年の英語検定2級よりも程度の高いものを、との配慮から、『7日間完成 英検準1級二次試験対策』（ECC編集 南雲堂出版、CD付き）と、TOEIC問題の参考として、『TOEICテスト完全模試』（ポール・スミンキー・坂本育生 共著 南雲堂出版、CD付き）を使用した<sup>5)</sup>。

講義中には、主に『英検準1級二次試験対策』の問題集を使用し、CDによるアメリカ人の模範解答の英語を、最初はテキストを見ずに聴き、次にもう一度CDを聴きながら、出来るだけ日本語に訳さず、易しい英語による解説を加えるようにした。さらに、今回の集中講義での注目すべき点は、リスニングの際には、出来るだけ英語の音声を口でたどってゆく、シャドウイングを実行するように、受講生に対して指導した<sup>6)</sup>。その後、内容把握が出来た後に、ポーズを取りながら、CDの音声の後につけて、コーラス・リーディングを出来る限り多く行なった。やはり、学生を講義に集中させ、且つ、シャドウイング、リスニングの訓練のためにも、音読を加えることが大切であると考えているからである。正味13コマの講義で、120ページあまりのテキストの内容を、全てを終了することができた。他に、TOEICテストの問題形式に慣れ、また、リスニングの問題が放送される前に、解答の選択肢を予め読んでおく、いわゆる、スキーマ理論に基づく「トップ・ダウン」のテクニックも、『TOEIC完全模試』の問題集を用いて、出来るだけ学生に身に付けさせるように努めた<sup>7)</sup>。問題に解答する際に、選択肢から得られる先行知識が、正解を選ぶための良いヒントと成りうるかどうか、特に注目された。TOEIC受験のためのテクニック養成にすぎないと批判があるかもしれないが、指導方略の実践の一例と考えていただきたい。

講義期間中、最初は戸惑いを隠せなかった受講生が、数多く見られたが、英語を聴き続け、且つシャドウイングを繰り返すにつれて、次第にCDやビデオの英語に慣れてゆくことが、明確に感じとられた。また、見事な日本語に翻訳することには全く拘わらず、同時通訳の要領で前から順番に理解することを旨として指導したので、受講生側も、気楽な気持ちで、英語に接することができ、いわゆる、「直聴直解」の方針が、少しずつ浸透していったように思われた。

また、『英語リスニング科学的上達法』や垣田（1998）に示されているように、日英語の音韻の違いにも特に注意を払い、日本語と英語の母音数の差（英語：10あまり、日本語：約5）、子音の違い、特に、[l]と[r]、[v]と[b]、[h]と[f]の相違や文脈からの判断などに注意しながら、音

声を識別するようにとの指導を心がけた。

## (Ⅱ) - 2 仮 説

先行研究から、さらに焦点を絞り、シャドウイングやスキーマ理論、また、音韻論の科学的要素を取り入れた指導方略により、集中講義の事前・事後において、若干の得点の伸長が予想されたが、どの程度の伸長となるのかは、殆ど予測がつかなかった、しかも、今回のテストは、TOEICという権威あるテストであり、受験生の幅も広く、受講生の英語力の測定の尺度としては、理想的なテストであったが、大学1、2年生にとっては、初めての受験経験であり、英文和訳と和文英訳にばかり接してきた学生にとっては、かなりのとまどいとなるのではないかと、という点が危惧された。英語検定2級のリスニングテストであれば、同一程度の問題が20問、約15分間のテストであるので、それほど受験生の負担となることはないが、TOEICリスニングの100問、45分間のテストは、受験生にとっても、かなりの負担である。問題も1度しか放送されないため、自信を無くしてしまう学生もいるのではないかと、ということも心配されたが、その点は登録者90名の中で棄権者は15名であった。

予想された仮説としては、事前テストにおいて、TOEICの大学卒業生の平均点と言われ且つ英語検定2級合格ライン前後とされる、45%から50%あまりの得点率が基準となるであろう、と筆者は仮想した。その点は昨年の先行研究の水準とほぼ同じ程度と推測したからである。しかしながら、英検よりもかなり負担が大きいので、40%にも満たない、極めて低い得点率になることも予測された。

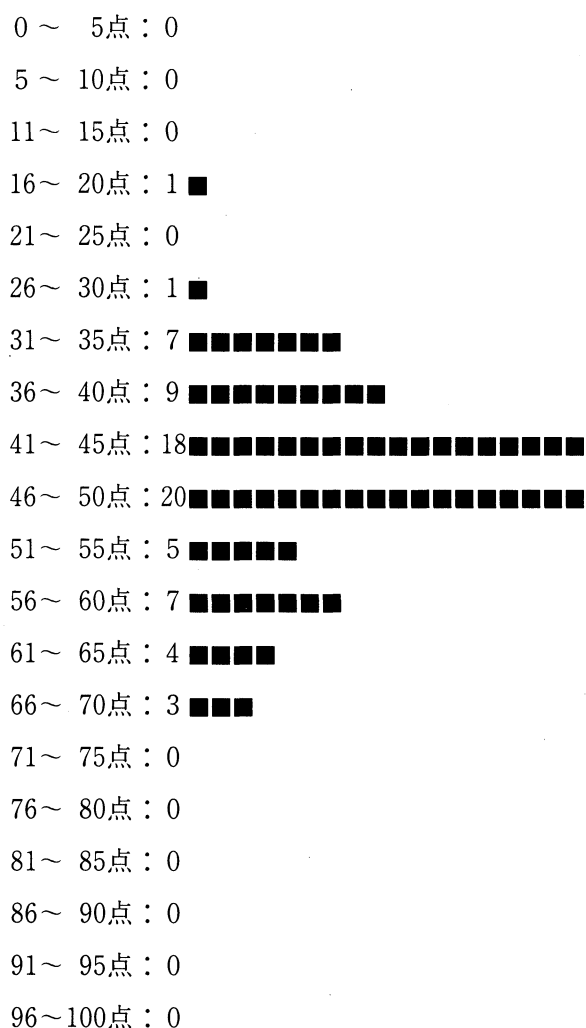
事後テストの得点としては、昨年のように50%もの得点の伸長はとても期待できないであろうが、英語検定2級合格以上とされる、TOEICで約550点、得点率にして、54%~55%あまりの伸長が得られれば、大きな成果となるであろう、と筆者は予測した。

標準偏差や分散に関しては、今回が初めてのデータ収集となったが、統計学上の原則に叶った結果が得られるかどうかは、全く見当がつかなかった。被験者である鹿児島大学の学生諸君の学力を信頼しつつ、筆者としては、統計処理に最善を尽くすのみであった。

## (Ⅲ) 結果と考察

今回の短期集中学習の事前・事後の同一問題によるTOEIC第2回公開テストのリスニングテストの結果の得点分布図、平均点、標準偏差、分散、最高得点(及び偏差値)、最低得点(及び偏差値)は、以下の図1、図2のグラフとデータに示すとおりである。

[図1：事前得点分布図]



平均点 (M) : 46.6点

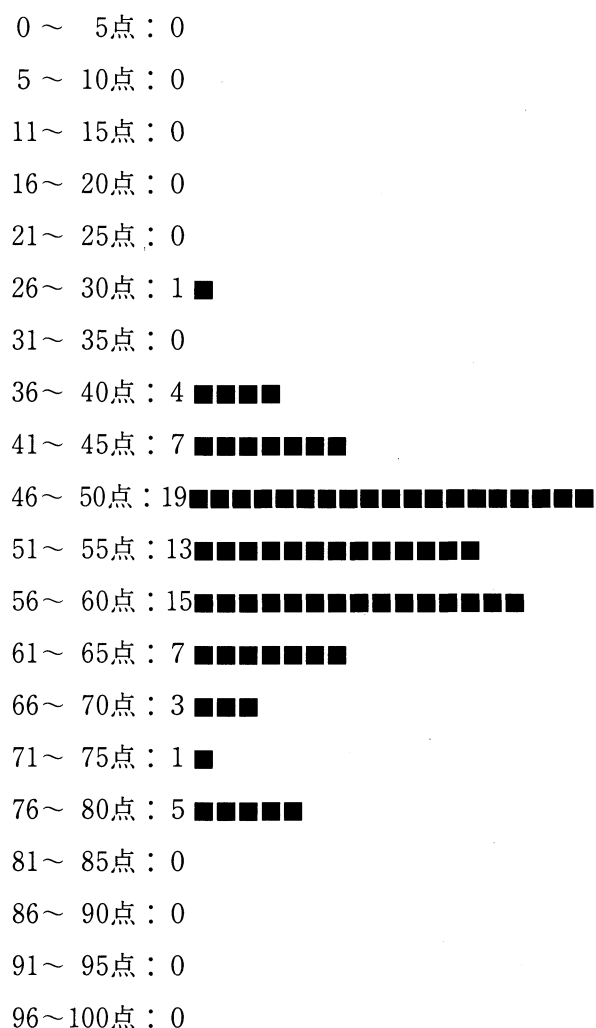
標準偏差 : 9.63

分 散 : 92.78

最高得点 : 68点 (偏差値 : 72.26)

最低得点 : 17点 (偏差値 : 19.42)

[図2：事後得点分布図]



平均点 (M) : 54.4点

標準偏差 : 10.25

分 散 : 105.16

最高得点 : 80点 (偏差値 : 74.6)

最低得点 : 30点 (偏差値 : 26.1)

平均点は、事前・事後において、素点において+7.8点（パーセンテージでも同じ）となり、かなりの伸長が見られた。TOEICテストの点数計算は、素点のみでは計れない複雑なものであるため、断定はできないが、7.8%の伸長といえ、点数にすれば、TOEICテスト990点満点にして、70点から80点ということになり、わずか7日間で、大きな伸長が見られたことになる。また、事前テストでは50%に満たなかった得点率が、事後テストでは、それを越えることが出来たということも、意義ある結果となった。

次に、テスト作成の目安となる、平均点50%、標準偏差10という、統計学上の一般的数値を鑑みても、事前・事後の両方のテストとも、それに近い数値を示しており、TOEICテストの信頼性が、改めて証明されたように思われる。得点者の分散も、若干の逸者も見られたが、全体として、(平均点) ± (標準偏差) × 3 の範囲内に納まっており、統計学上の原則に叶ったものとなっている。

棒グラフを比較すると、事前テストと事後テストにおいて、ちょうど約50%を境界として、人数の分散の山が、少しずつ上昇していることが判明している。ただ、正規分布を示す数値とはならなかったが、その点は受講者の個人差のバラツキや学力差、動機付け等の要素が関係しているように思われる。

事後の得点が、事前の得点の及ばなかった事例は、わずか3例にすぎなかったし、いずれの場合も50点前後において、3点未満のものであった。他に同一得点の事例が5例あり、他の67例においては、すべて得点の伸長が見られた。

#### (IV) 結 論

以上のデータから、今回の研究において、短期集中学習の事前・事後における、リスニング能力の向上が、かなり明確に証明され、特に、シャドウイングとトップダウンリスニングストラテジーは、その有効性が示されたように思われる。つまり、短期間の集中学習によっては、確かに大きな伸長や語彙力の充実は期待できないかもしれないが、学生個人個人の潜在能力を引き出し、スキーマ理論に基づく、推測力の養成はある程度可能であるように思われる。

また、統計学上の分析からも、鹿児島大学の学生は、日本の大学生として、標準レベルかややその上をゆく水準にあり、TOEICレベルのテストにも、十分に耐えうる英語力を持つことが実証された。さらに、将来の21世紀の大学教育においては、国際的な英語能力測定テストとして、TOEICやTOEFLが、一層重要な役割を果たすと思われるので、今回のTOEICを測定基準とした研究が、益々重要になってくるように思われる。今後とも、国際的な基準から、日本人大学生の英語力向上を図るためにも、研究を続けたいと考えている。

尚、Appendixとして、今回の集中講義の受講生からの、興味深いアンケートの抜粋を、巻末に参考として列挙しておく。

#### (註)

- 1) 詳細は、坂本(1998)及び、坂本(1999)を参照。
- 2) 大学英語教育学会九州・沖縄支部研究プロジェクトチーム(1997)によると、TOEFLその他のProficiency testによる比較で、日本の大学生の能力の貧弱さが、詳細に述べられている。
- 3) 太田(1994)によると、リスニングを中心とした自己学習により、TOEIC400点程度のかなり低い英語力の学生であっても、1500時間から2000時間の自己学習によって、TOEIC700点にまで得

点が向上した興味深い実例が、多数記されている。また、constituent（訓練段階）に関する詳細は、小池（1993）を参照。

- 4) 実施したTOEICテストは、全国大学生生活協同組合連合会発行の『TOEIC体験キット』に掲載された「第2回公開テスト問題」を使用した。尚、今回の集中講義受講者の中では、TOEIC受験経験者は皆無であった。当然のことながら、受講生に対しては、最初と最後に同一問題によるTOEICテストを実施するという事は通知してはいない。ただし、最初と最後のテストの結果によって成績評価を下す、ということは伝えてあるので、受講生としては、まさに真剣勝負のテストとなっている。
- 5) 1日4コマの講義がある日が2日あったため、午後からの講義において、気分転換と耳慣らしのために、“Star Wars”の字幕付きビデオ映画を2本上映し、集中的に英語に耳を慣れさせる訓練を行なった。英語を学ぶための、いわゆる「動機付け（motivation）」のためにも、ビデオ映画はかなりの効果があることが、受講生からのアンケートにも多数寄せられた。尚、英語学習の動機付けや、学習意欲に関する詳細は、垣田（1993）などを参照。
- 6) 学生に対して実施したアンケートでは、これまでシャドウイングの訓練を受けた経験のある者はほとんど無く、今回の短期集中学習における、注目すべき指導方略である。
- 7) スキーマ理論に関しては、安藤（1991）を参照。また樋口（1998）には、スキーマ理論に基づいた、「ボトムアップ」及び「トップダウン」のストラテジーによる、オーラルコミュニケーションに関して、興味深い記述が見られる。

#### 参 考 文 献

- 安藤昭一編集（1991）『英語教育 現代キーワード事典』 大阪：増進堂
- A T R 人間情報通信研究所編集（1999）『英語リスニング科学の上達法 音韻篇』 東京：講談社
- 大学英語教育学会 九州・沖縄支部研究プロジェクトチーム（1977）『このままでよいか大学英語教育 一中・韓・日 3か国の大学生の英語学力と英語学習実態一』 東京：松柏社
- 樋口晶彦（1998）「スキーマ理論に基づいたリスニングストラテジー —オーラルコミュニケーション（B）を中心に—」 『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 第49巻』
- 垣田直己監修（1988） 英語学習モノグラフシリーズ『英語のリスニング』 東京：大修館書店
- 垣田直己監修（1993） 英語教育モノグラフシリーズ『英語の学習意欲』 東京：大修館書店
- 小池生夫監修（1993） 『英語のヒアリングとその指導』 東京：大修館書店
- 国際コミュニケーションズ編集（1998）『TOEIC体験キット（第2回公開テスト問題）』 全国大学生生活協同組合連合会
- 太田信雄（1994）「外国語教授法と学習法について —千葉商科大学方式トピックメソッドを中心に—」 『国府台経済研究』 千葉商科大学経済研究所

坂本育生 (1998) 「リスニング能力向上における短期集中学習の効用について」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第8巻』

坂本育生 (1999) 「リスニング能力向上における短期集中学習の効用について(II)」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 第50巻』

#### Appendix : 集中講義受講者からの受講後の主な感想

- ・最初にやったリスニングテストは、すごく速いスピードで英語を話しているの、何のことだか全くといっていいほどわからず、テストはほとんど直感に頼ってマークしていたが毎回の講義とシャドウイングのおかげで、何となく話が話している内容の一部がつかめるようになってきたような気がした。(工学部1年男子学生 34点から45点に上昇)
- ・英語を毎日聴くことで、耳が少しずつ慣れていくような感じがしました。今までの英語の授業でこんなにリスニングを集中的にやったことはなかったので、とても新鮮な感じを受けました。映画でも音楽でも、毎日英語に慣れ親しむことが大事じゃないか、と感じました。これからも勉強を続けて、TOEICか英語検定試験に挑戦したいと思います。短期間でしたが、英語学習を見直すよいきっかけになりました。(農学部1年男子学生 42点から48点に上昇)
- ・5日間だけの講義でしたが、少しは英語に慣れることが出来たと思います。また、映画を見ることによって、リスニングの勉強が楽しくできたこともよかったです。これから秋のTOEICに向けて勉強しようと思います。英語に対する学習意欲が増した集中講義でした。(工学部1年男子学生 44点から50点に上昇)
- ・5日間集中して英語に耳を慣らすことができ、また映画を見ることが出来たのもとてもよかったです。英検準1級の面接テストの模擬テストもやったが、あのくらいの面接テストなら出来そうな気もした。さすがに、CDと同じ速さでは喋れないけれども、何とか2分間スピーチくらいはできるかもと感じました。(水産2年男子学生 68点から80点の最高得点を記録)
- ・最初のTOEICに始まり、TOEICに終わる。そして途中には、英語のリスニングを兼ねてのビデオ、さらに映画の上映。テキストはしっかりと終わるし、申し分ない時間配分。夏期集中講義だから出来ることであるが、とても勉強になったし楽しめた。テキストの長文を2回音読するのもよかったですし、シャドウイングは初めての試みだったが、大いにリスニングの手助けとなった。最後のTOEICテストは、初めよりも随分よく理解できた。(工学部1年男子学生 39点から46点に上昇)
- ・集中講義を受けて、リスニングの効果的な方法や英語検定の面接の方法などがよくわかりました。また、自分のリスニングの仕方が間違っていたことに気づきました。とにかく英語に慣れて、且つシャドウイングを試み、選択肢から正解を類推することが大事だとわかりました。TOEICのリスニングも、初めは感に頼っていましたが、最後のテストは、今までよりも、ずっとよく聴きとれました。(歯学部1年男子学生 48点から58点に上昇)
- ・今回の講義は本当に役立ちました。TOEICや英検の面接試験がどのようなものかが、よくわかり



